

国道バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度

佐古川・窪田遺跡
北内遺跡
鴨部・川田遺跡
野牛古墳
末3号窯跡

1999. 3

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度

正誤表

位置・	誤	正
25頁13行	「中・四国の墓」	「弥生前・中期の墓」

例 言

1. 本書は国道バイパス建設に伴い、平成10年度に実施した埋蔵文化財調査事業の概要を記録したものである。本年度は、佐古川・窪田（さこがわ・くぼた）遺跡、北内（きたうち）遺跡の発掘調査と、綾南D（りょうなんD）地区、栗熊（くりくま）地区の予備調査、および鴨部・川田（かべ・かわた）遺跡、野牛（のご）古墳、末3号（すえ3ごう）窯跡の整理作業を実施した。

2. 本事業は、建設省四国地方建設局から委託を受け、調査主体 香川県教育委員会、調査担当 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3. 財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの、本事業に関する調査体制は次のとおりである。

総括	所 長	菅原良弘
	次 長	小野善範
総務	参 事	別枝義昭
	副主幹兼係長	田中秀文
	主 事	細川信哉
調査	参 事	長尾重盛
	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	森下友子
	文化財専門員	古野徳久
	文化財専門員	川井國博
	技 師	乗松真也
	調査技術員	中村文枝

4. 調査にあたっては、次の機関の御協力と各位の御教示を得た。記して感謝したい。

綾歌町教育委員会、綾歌町建設課、津畑池水利組合、水橋池水利組合、堤池水利組合、烏田・梨岡自治会、一丁地自治会、馬指A自治会、馬指B自治会、中馬指自治会、川西自治会、東馬指自治会、住吉西自治会、綾南町建設課、綾南バイパス対策協議会（順不同）

秋山浩三、大久保徹也、近藤武司、柴田昌児、角南聡一郎、高田浩司、新居勉（五十音順、敬称略）

5. 本書の執筆は、藤好・森下・古野・乗松が行い、乗松が編集した。また、佐古川・窪田遺跡、北内遺跡の遺物実測図の作図は、森下英治・信里芳紀・乗松・岡野雅子・佐々木博子が行い、浄書は信里・岡野が行った。その他川井・中村の補助を得た。

6. 挿図の一部に国土地理院発行地形図（1/25,000 善通寺・滝宮）を使用した。

本文目次

I. 平成10年度事業の概要（藤好）	1
II. 国道32号バイパス建設に伴う発掘調査	
1. 綾南D地区予備調査（乗松）	2
2. 栗熊地区予備調査（乗松）	3
3. 佐古川・窪田遺跡（乗松）	5
4. 北内遺跡（乗松）	16
5. まとめ（乗松）	23
III. 資料整理の概要報告	
1. 鴨部・川田遺跡（森下）	26
2. 野牛古墳（古野）	28
3. 末3号窯跡（古野）	29

挿図目次

図1 調査対象遺跡及び周辺遺跡地図	2	図10 周溝墓17主体部平・断面図	15
図2 綾南D地区トレンチ配置図	3	図11 木棺墓1・土坑12・土坑3出土遺物	18
図3 栗熊地区トレンチ配置図	4	図12 土坑36・井戸10・土坑5・井戸11 出土遺物	19
図4 V・Ⅶ区周溝墓群平面図	7	図13 溝26出土遺物	20
図5 Ⅵ区周溝墓群平面図	9	図14 北内遺跡遺構配置図(1)	21
図6 佐古川・窪田遺跡遺構配置図(1)	11	図15 鴨部・川田遺跡出土土器	27
図7 佐古川・窪田遺跡遺構配置図(2)	13		
図8 周溝墓出土遺物	15		
図9 周溝墓15主体部平・断面図	15		

表目次

表1 平成10年度調査工程表	1	表2 佐古川窪田遺跡検出周溝墓一覧表	10
----------------	---	--------------------	----

写真目次

写真1 周溝墓3群（Ⅶ区）南東から	5	写真11 井戸11遺物出土状況 北から	17
写真2 周溝墓3群（Ⅴ区）南東から	5	写真12 Ⅳ区古代末～中世初頭遺構面 東から	17
写真3 周溝墓31・32 南東から	6		
写真4 周溝墓15・16・26・27 東から	6	写真13 掘立柱建物1 南東から	18
写真5 周溝墓38遺物出土状況 南から	6	写真14 溝26遺物出土状況 北西から	18
写真6 周溝墓26主体部土層断面 南から	6	写真15 鴨部・川田遺跡 弥生時代環濠集落	26
写真7 大溝5 南から	16	写真16 鏡面麻布付着状況	28
写真8 大溝5土層断面 南から	16	写真17 石棺全景（蓋石除去後）	28
写真9 木棺墓1棺痕跡検出状況 東から	17	写真18 末3号窯跡	29
写真10 木棺墓1遺物出土状況 東から	17	写真19 窯跡下方の通路状遺構	29

I. 平成10年度事業の概要

平成10年度の国道関係の埋蔵文化財の発掘調査事業は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成10年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。綾南バイパスと綾歌バイパス建設用地の調査で対象地面積は6,300㎡であり、調査期間は平成10年4月1日～平成11年1月31日である。委託内容は、まず、綾歌バイパス予定地内にある佐古川・窪田遺跡の調査、その後、綾南バイパス予定地内の綾南D地区、綾歌バイパス予定地内の栗熊地区の予備調査、そして、綾歌バイパス予定地内の北内遺跡の調査を順次実施するものである。

佐古川・窪田遺跡の調査対象地面積は昨年度未調査部分1,375㎡であるが、用地の買収状況により1,164㎡の調査を実施した。残りの211㎡については次年度以降対応することとなった。

綾南D地区の予備調査は、用地買収状況から昨年度実施できなかった部分について行った。実掘面積は45㎡である。

栗熊地区の予備調査は昨年度に引き続いて行ったが、一部用地未了のため未調査の部分がある。実掘面積は564㎡である。

北内遺跡は昨年度、馬指地区として予備調査した部分である。今年度発掘調査を実施した対象地面積は5,608㎡である。

以上、平成10年度の国道32号関係の発掘調査面積は7,381㎡である。

整理事業は、平成3年度に発掘調査を行った国道11号バイパスに伴う鴨部・川田遺跡を平成9年度に続いて実施し、また、平成7年度に発掘調査を行った野牛古墳、平成3、7年度に発掘調査を行った末3号窯跡について実施した。(藤好)

区分	遺跡名	調査工程											
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
発掘調査	佐古川・窪田遺跡	■											
	北内遺跡				■								
	綾南D地区予備調査			■									
	栗熊地区予備調査				■								
整理	鴨部・川田遺跡	■											
	野牛古墳						■						
	末3号窯跡									■			

表1 平成10年度調査工程表

II. 国道32号バイパス建設に伴う発掘調査事業



1. 綾南D地区予備調査

a. 調査の概要

綾南D地区は綾南町小野に所在しており、籠池に面した西向きの丘陵斜面にある。丘陵頂部には白梅古墳群が存在する。

調査対象地は開墾による削平が激しく、遺構は全く検出できなかった。

(乗松)

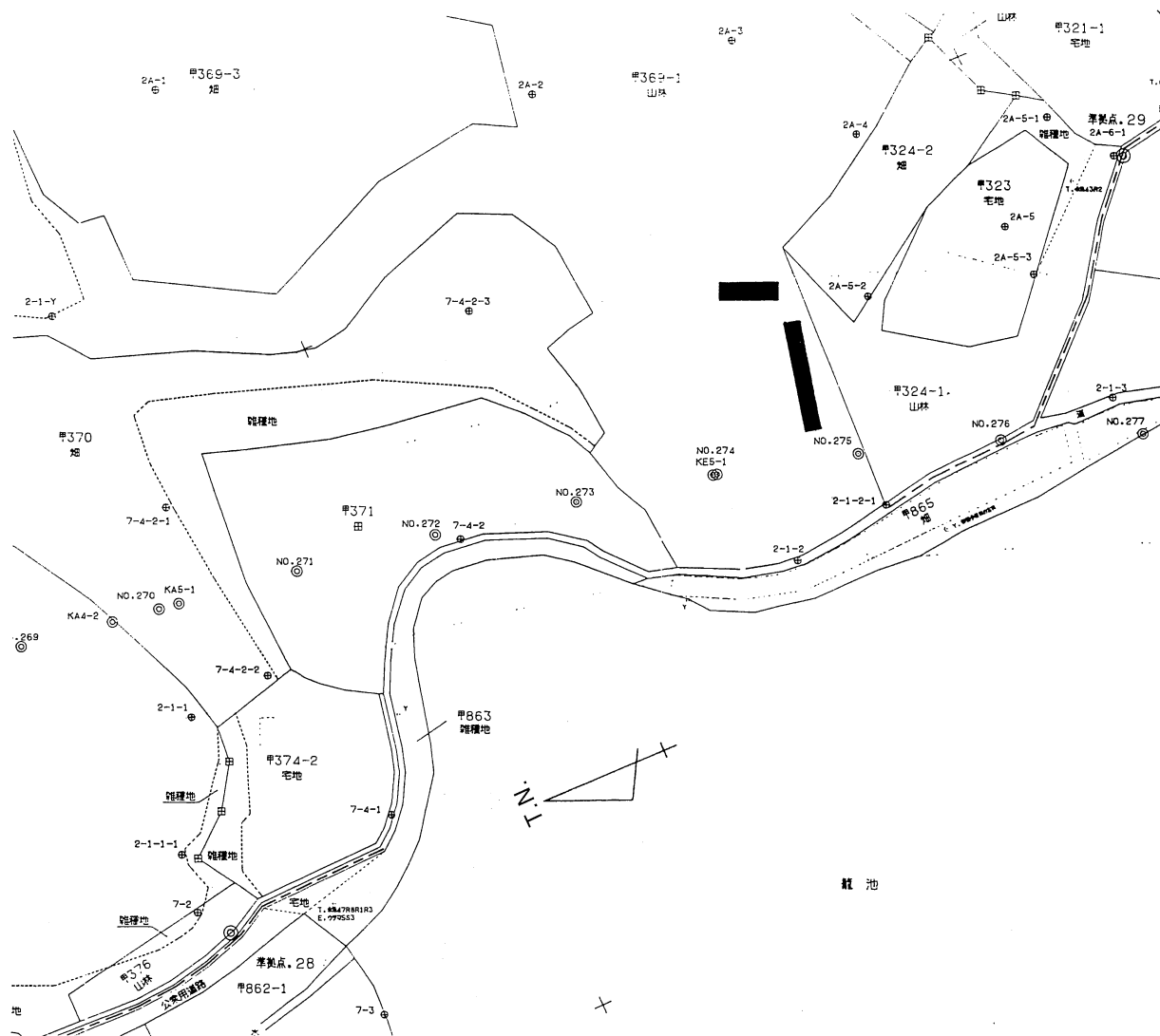


図2 綾南D地区トレンチ配置図 S=1/1000

2. 栗熊地区予備調査

a. 調査の概要

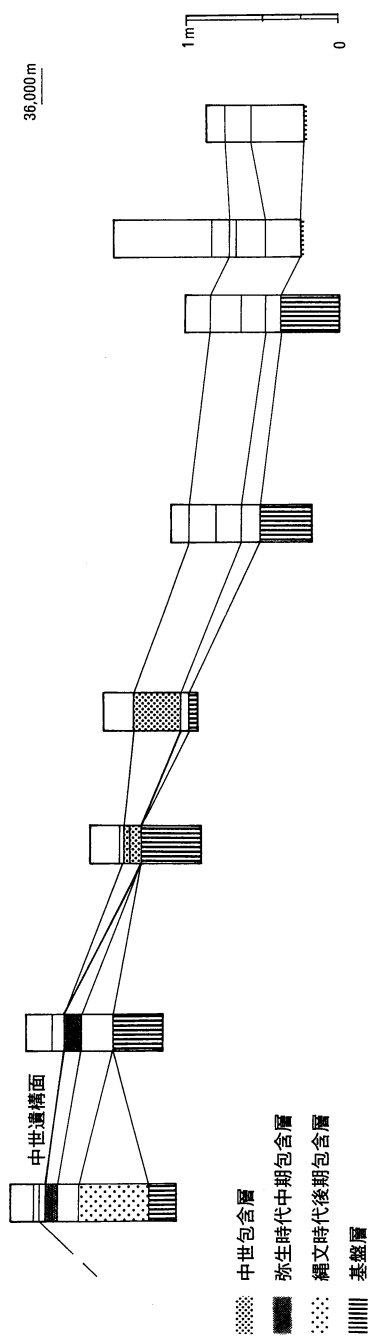
佐古川・窪田遺跡のある微高地と東大東川との間を栗熊地区として予備調査を行った。

13トレンチ以西は微高地間の谷部で遺構は検出できなかった。近代まで湿地であったことが、地元で言い伝えられており、長く開発から取り残されていたようである。

一方、14トレンチから東大東川までの間は東に向かって高くなる微高地となっており、中世前半（12～13c）の安定した遺構を検出した。24トレンチでは地割の方向に合致する南北方向の平行する2本の溝を検出した。溝から土師器の小皿が出土した。また、一部、後述する北内遺跡と平行する弥生時代中期初頭（櫛描文を施した土器を中心に含む）の包含層を確認している。24トレンチでは縄文時代後期後半の遺物を多量に含む包含層を検出した。基盤層に類似した土層中に部分的に遺物が集中しており、流路もしくは落ち込みを検出したものと考えられる。

上述の状況から14トレンチ～東大東川までの間は遺構が拡がることがほぼ確実なため、池下(いけした)遺跡と命名し、次年度以降本調査を行う。

(乗松)



- 中世包含層
- 弥生時代中期包含層
- 縄文時代後期包含層
- 基礎層

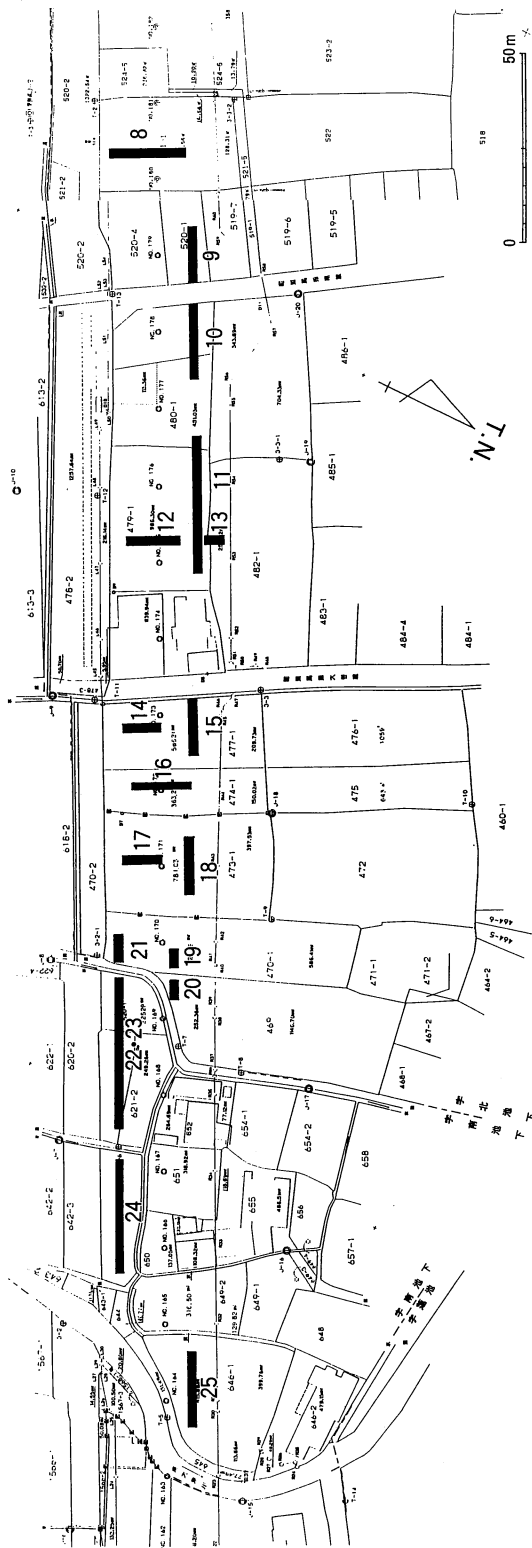


図3 栗熊地区トレンチ配置・柱状図

3. 佐古川・窪田遺跡

a. 立地

佐古川・窪田遺跡は中大東川上流の東岸に位置している。周辺には次見遺跡・行末遺跡・行末西遺跡と弥生時代前期の遺跡が存在し、綾歌町地域では当遺跡や北内遺跡を含めて弥生時代前期～中期前半までは、ほぼ連続的に集落が営まれていたと思われる。

b. 調査の概要

佐古川・窪田遺跡の調査は便宜上、7つの調査区に分割して行い、それぞれⅠ～Ⅶ区とした。Ⅰ～Ⅵ区までは平成9年度中に調査を終了しており、今年度はⅦ区の調査を行った。

平成9年度の調査で弥生時代前期後葉～中世前半までの各時期の遺構を確認しており、今年度の調査でも弥生時代前期後葉～中期初頭の周溝墓群、古墳時代後期の竈を持つ堅穴住居、中世前半の掘立柱建物等を検出した。

c. 弥生時代前期後葉～中期初頭の遺構・遺物

周溝墓群：周溝墓群は南西から北東に向かって緩やかに下る、微高地の縁辺に存在する。周溝墓群はその空地地によって4群に分けることが可能であり、Ⅶ区ではそのうち2群の一部と3群の一部を検出している。

2群では平成9年度調査分と合わせて、方形周溝墓8基、円形周溝墓5基の計13基の周溝墓を検出している。

周溝墓31は北西隅を検出していないものの、推定規模10×7mを測り、「コ」の字状を呈している。南北それぞれの周溝の東端部分は深くなっている（検出面との高低差は約70cm）ため、東側の周溝が削平されているとは考えにくい。3辺のみを区画することを意識して築造されていたのであろう。周溝墓31では主体部は検出できなかった。周溝の深さから想定すると、周溝墓31の墳丘高は佐古川・窪田遺跡の中でも最も大きな部類に入り、墳丘の低い周溝墓に比べてより高い位置に主体部あったものと考えられる。そのため、主体部が後世の削平によって失われた可能性が高い。なお、南側の周溝の東端部分から完形の甕（図8・1）、蓋、上部が約1/3残存している壺が出土した。



写真1 周溝墓3群（Ⅶ区）南東から



写真2 周溝墓3群（Ⅴ区）南東から

また、周溝墓31の北に平行するように周溝墓32がある。南側の周溝が東端部分で北に続かないことと、南東隅のコーナー部分を確認しているため、周溝墓31同様「コ」の字状の周溝墓であると想定できる。なお、南側の周溝からは甕(図8・2)が出土している。

3群は21基の周溝墓で構成されているが、方形周溝墓20基、円形周溝墓1基と方形周溝墓が圧倒的に多い。周溝内出土遺物や周溝墓の切り合い関係、形状等から周溝墓26→(15・27)→16→17→19→37、19→33→34→25といった築造順序を復原することができる。基本的に微高地の高い部分(南)から低い部分(北)へと築造されていったと考えられる。また、遺物から判断して周溝墓21・28が後出する。

主体部は1～3群で計12基において検出している。うち、7基の周溝墓で木棺痕跡が確認できた。V～Ⅶ区(3・4群)では土層の識別が非常に困難であったことを考慮すれば、木棺痕跡の確認できていない長方形の土壇も本来、木棺が納められていた可能性が高い。周溝墓40の主体部の長軸長は1.1mであるが、木棺が埋められていたとすれば、その内法は更に小さくなり、周溝墓40は小児用の周溝墓であると考えられる。また、周溝墓17の主体部は他の周溝墓と異なり、円形の土壇が採用されている(図10)。

主体部の主軸方向は周溝墓17・18・39を除いて、およそ東西方向であるが、2群のもの(周溝墓8)は1群のもの(周溝墓3)に比べて若干東に振っており、3群のもの(周溝墓15・16・26・34・37)は更に東よりである。3群の周溝墓の主軸方向は3つに分けることが可能であり、上述のおよそ東西方向のものが多勢を占め、およそ南北方向を向くもの(周溝墓19)、両者の間(北西-南東方向)のもの(周溝墓18・39)がある。(乗松)

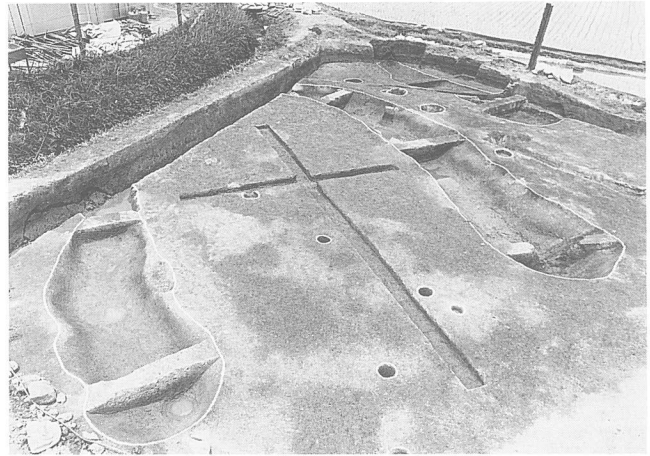


写真3 周溝墓31・32 南東から



写真4 周溝墓15・16・26・27 東から

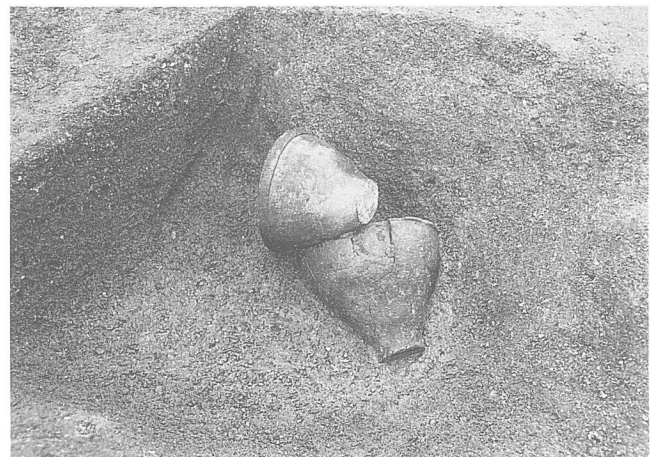


写真5 周溝墓38 遺物出土状況 南から

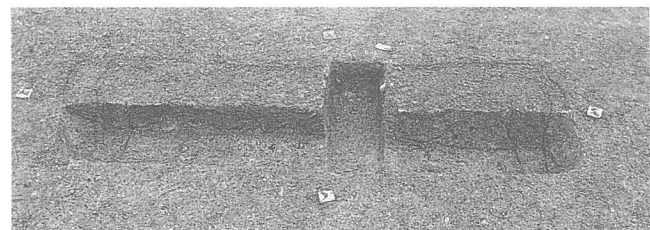


写真6 周溝墓16 主体部土層断面 北から

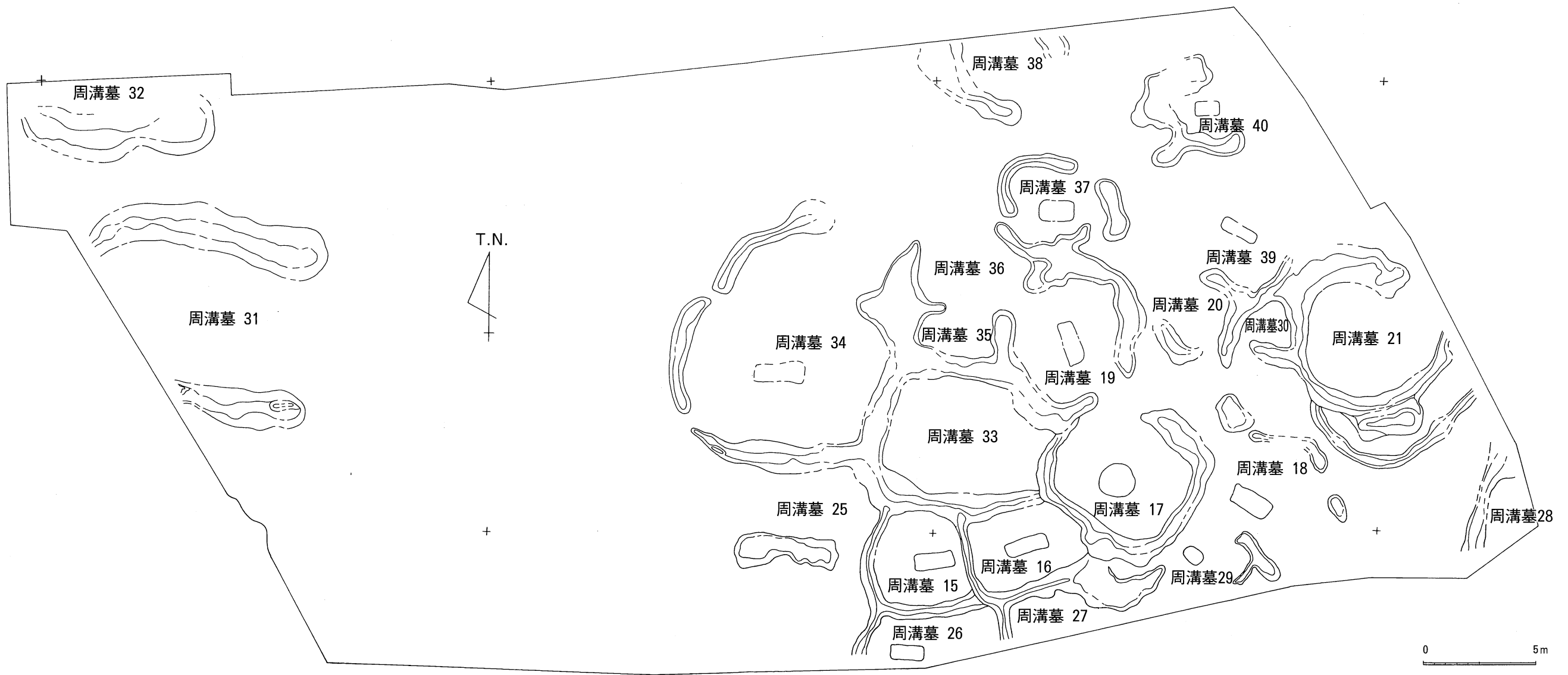


图4 V·VII区周溝墓群平面图

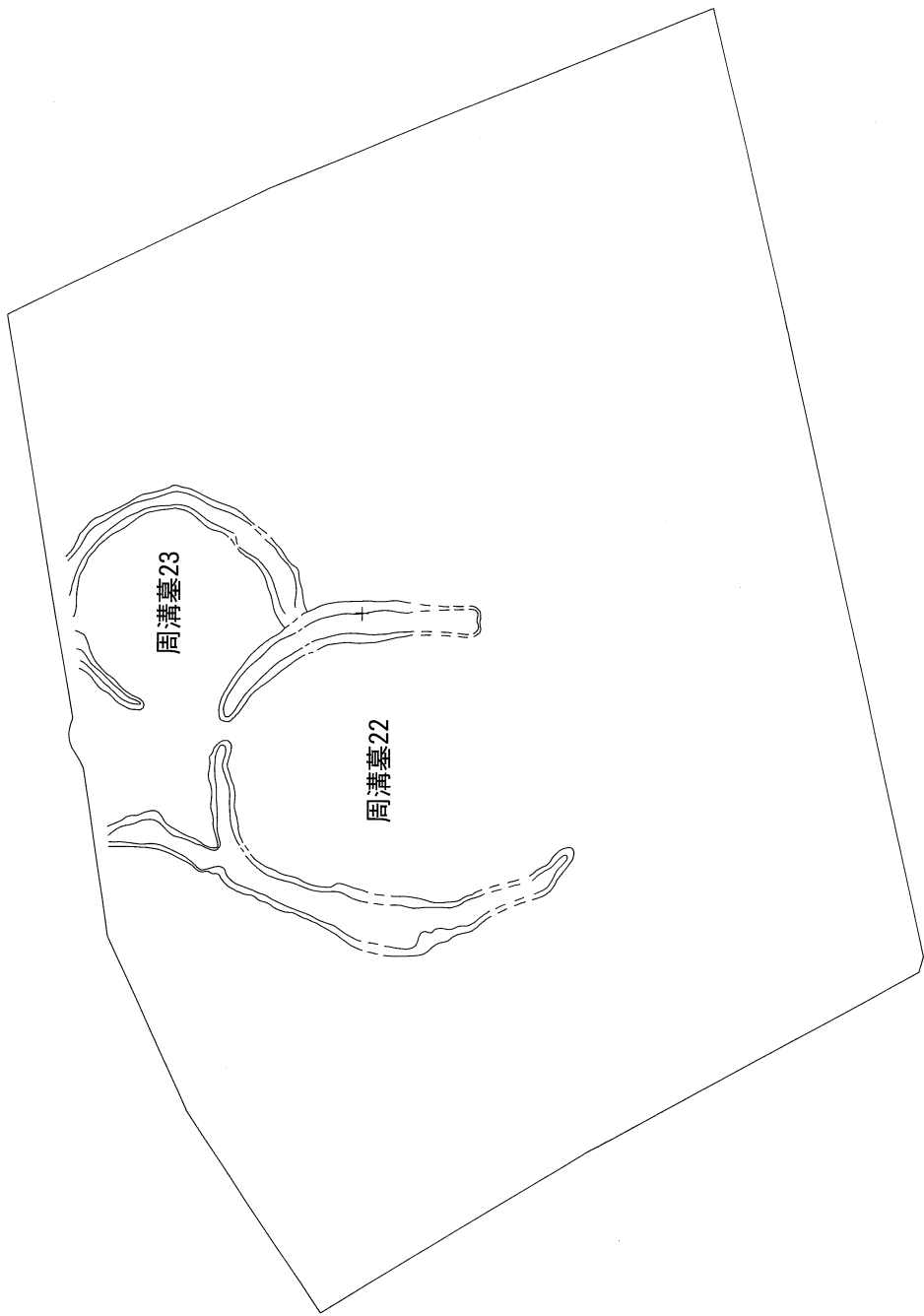


图5 VI区周溝墓群平面图

T.N.

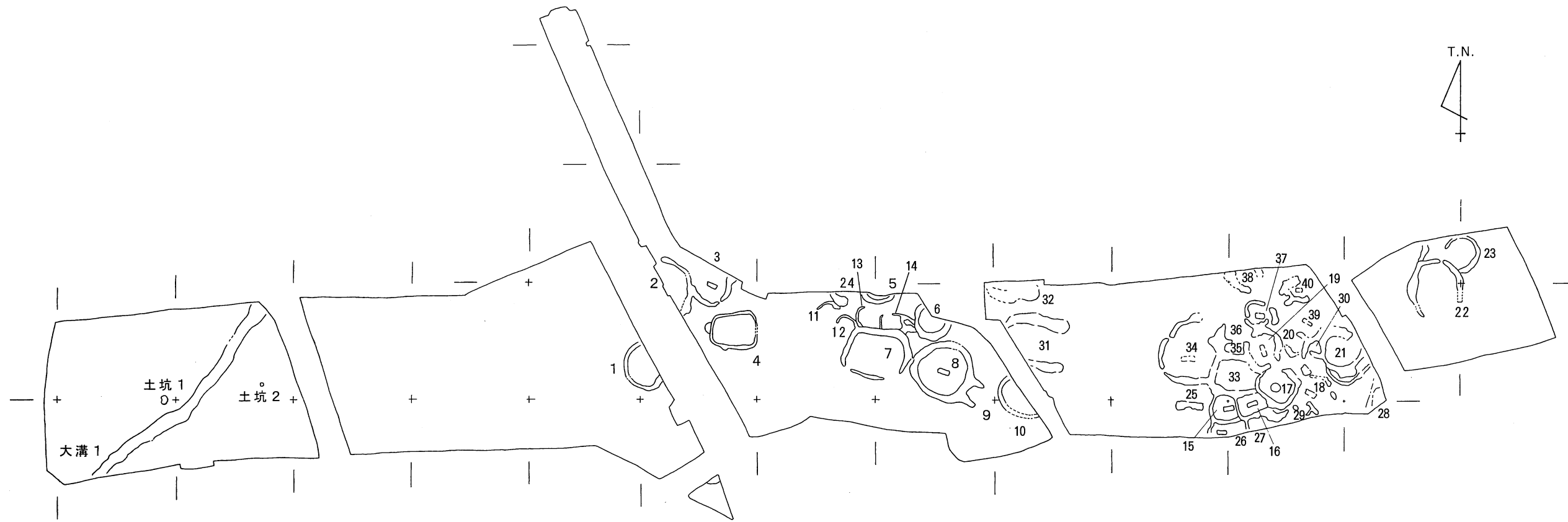
周溝墓	群	墳 丘		周 溝 出土遺物	主 体 部				時期
		形 態	規模 (m)		形態	外法(m)	内法(m)	副葬品	
1	1	円 形	7.0×5.5+						I
2	1	円 形	9.4+						I
3	1	不整円形	5.6×?		木棺	1.75×0.7	1.2×0.5	管玉 2	I
4	1	長 方 形	7.7×5.6	甕					II
5	2	円 形	4.6+	壺					II
6	2	円 形	5.2	壺					II
7	2	長 方 形	9.5×7.3	鉢					II
8	2	円 形	8.8×8.4	壺	木棺	1.8×0.7	1.6×0.45		II
9	2	長 方 形	3.0×2.7+						
10	2	円 形	(5.0)						
11	2	長 方 形	3.6×2.5+						
12	2	長 方 形	3.4×2.1+						
13	2	長 方 形	3.8×(3.7)						
14	2	長 方 形	3.6×2.6						
15	3	長 方 形	4.7×4.4		木棺	1.85×0.7	?	管玉 2	I
16	3	長 方 形	5.5×4.0		木棺	1.85×0.75	1.5×?	石鏃	I
17	3	長 方 形	6.0×4.6		土壙	1.5			
18	3	(長方形)	?	壺	土壙	1.9×0.9			I
19	3	長 方 形	5.4×5.3		木棺	1.75×0.65	1.2×0.5		
20	3	(長方形)	3.2×(2.4)						
21	3	円 形	6.0×5.7	壺					III
22	4	長 方 形	6.6×(9.0)						
23	4	円 形	5.8						
24	2	円 形	?	鉢					II
25	3	長 方 形	3.5×(6.4)						
26	3	(方 形)	6.4×2.4+	甕	土壙				I
27	3	(方 形)	(4.0)×1.2+						I
28	3	(方 形)	1.2+	壺					III
29	3	(方 形)	1.8×?	壺					I
30	3	長 方 形	2.7×2.3						
31	2	長 方 形	7.0×(10.0)	壺・甕・蓋					II
32	2	長 方 形	7.7×?	壺・甕					I?
33	3	長 方 形	7.3×5.8						
34	3	長 方 形	9.0×(6.6)		木棺	2.3×0.75	?	石鏃 2	
35	3	長 方 形	3.5×(2.4)						
36	3	長 方 形	2.6×?						
37	3	長 方 形	4.1×3.6	鉢	土壙	1.55×0.85			II
38	3	長 方 形	(3.6)×?	鉢 2					II
39	3	(方 形)	?		木棺	1.75×0.55	?		
40	3	長 方 形	2.8×(3.0)		土壙	1.1×0.65			

表 2 佐古川・窪田遺跡検出周溝墓一覧表

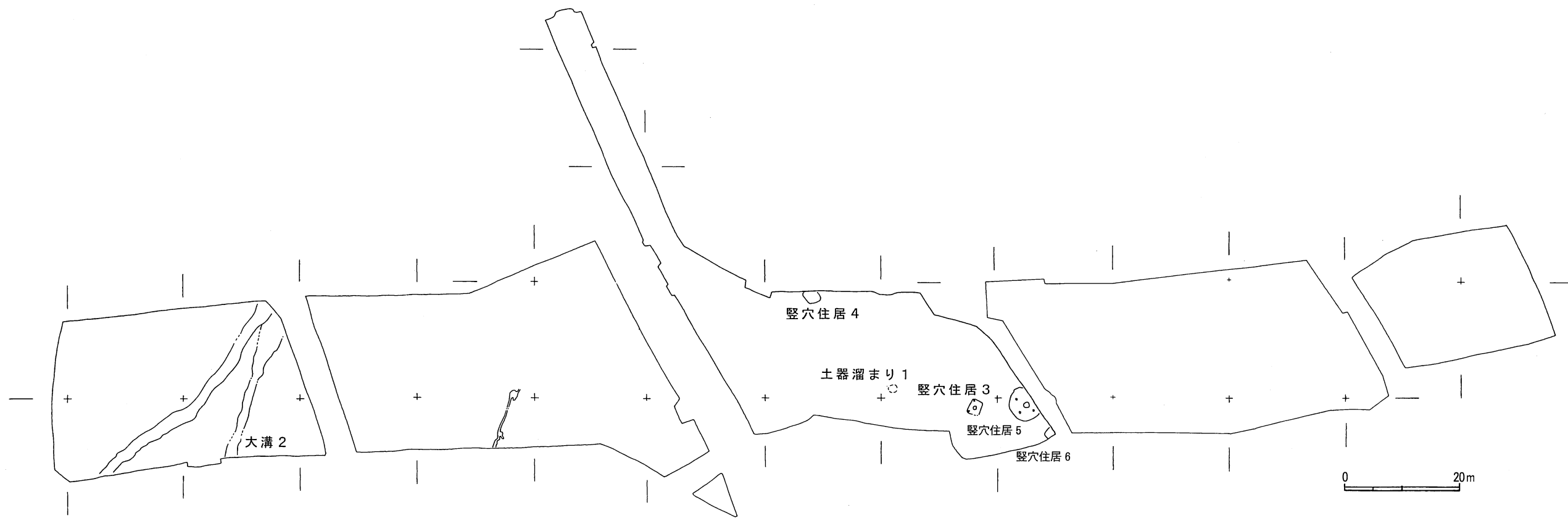
*墳丘規模の()は推定値

*周溝墓34主体部出土石鏃 2 点のうち、1 点は先端部と基部を欠損している

*時期は周溝出土遺物(完形、もしくは大形の破片)と周溝内埋土の切り合い関係から判断したものであり、それぞれ I : 前期後半中葉 II : 前期後半後葉 III : 中期初頭 を表している

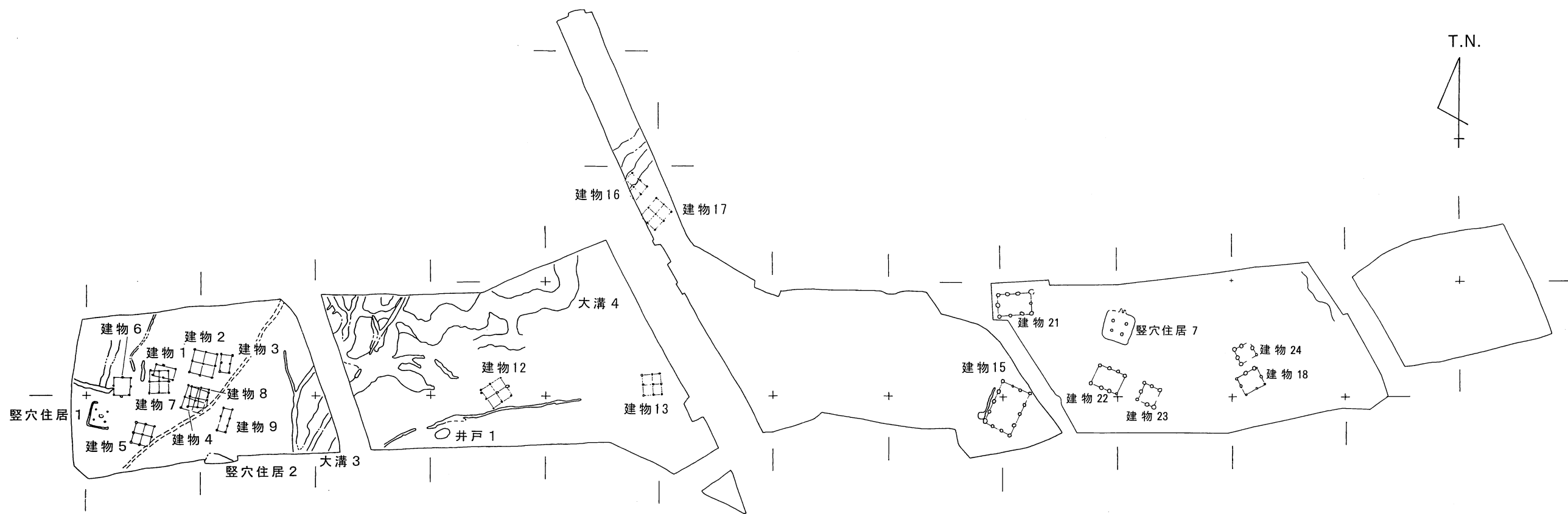


弥生時代前期



弥生時代後期

図6 佐古川・窪田遺跡遺構配置図 (1)



古墳時代後期

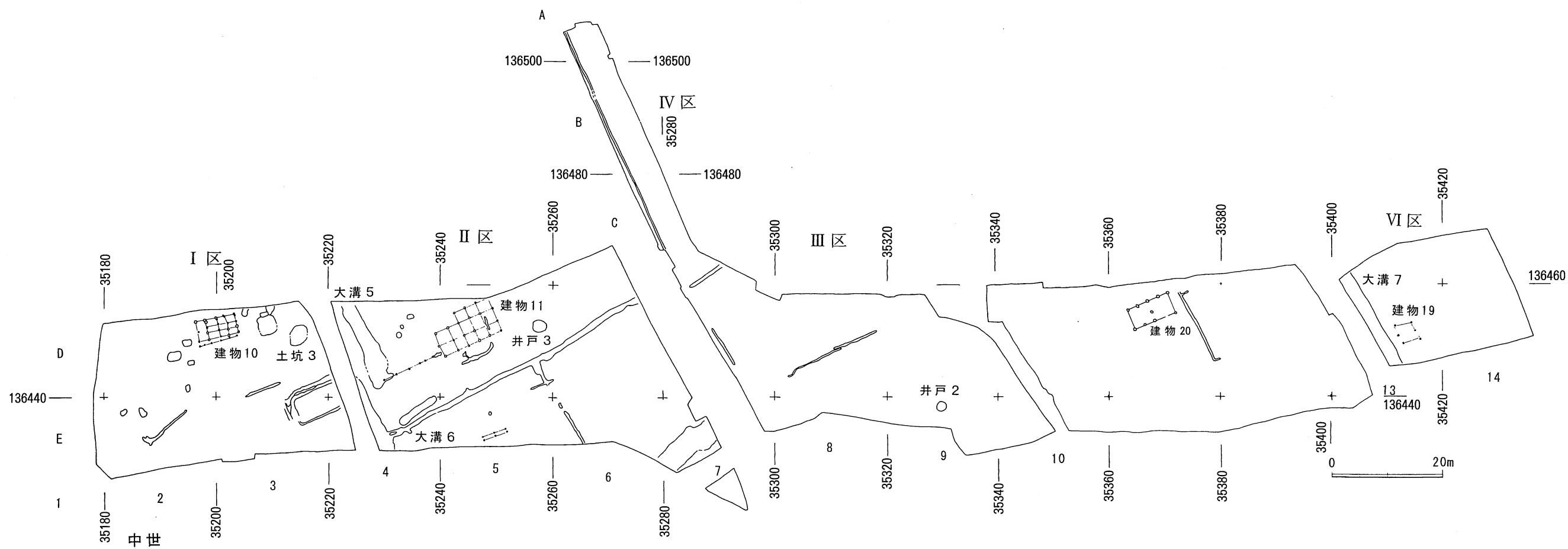
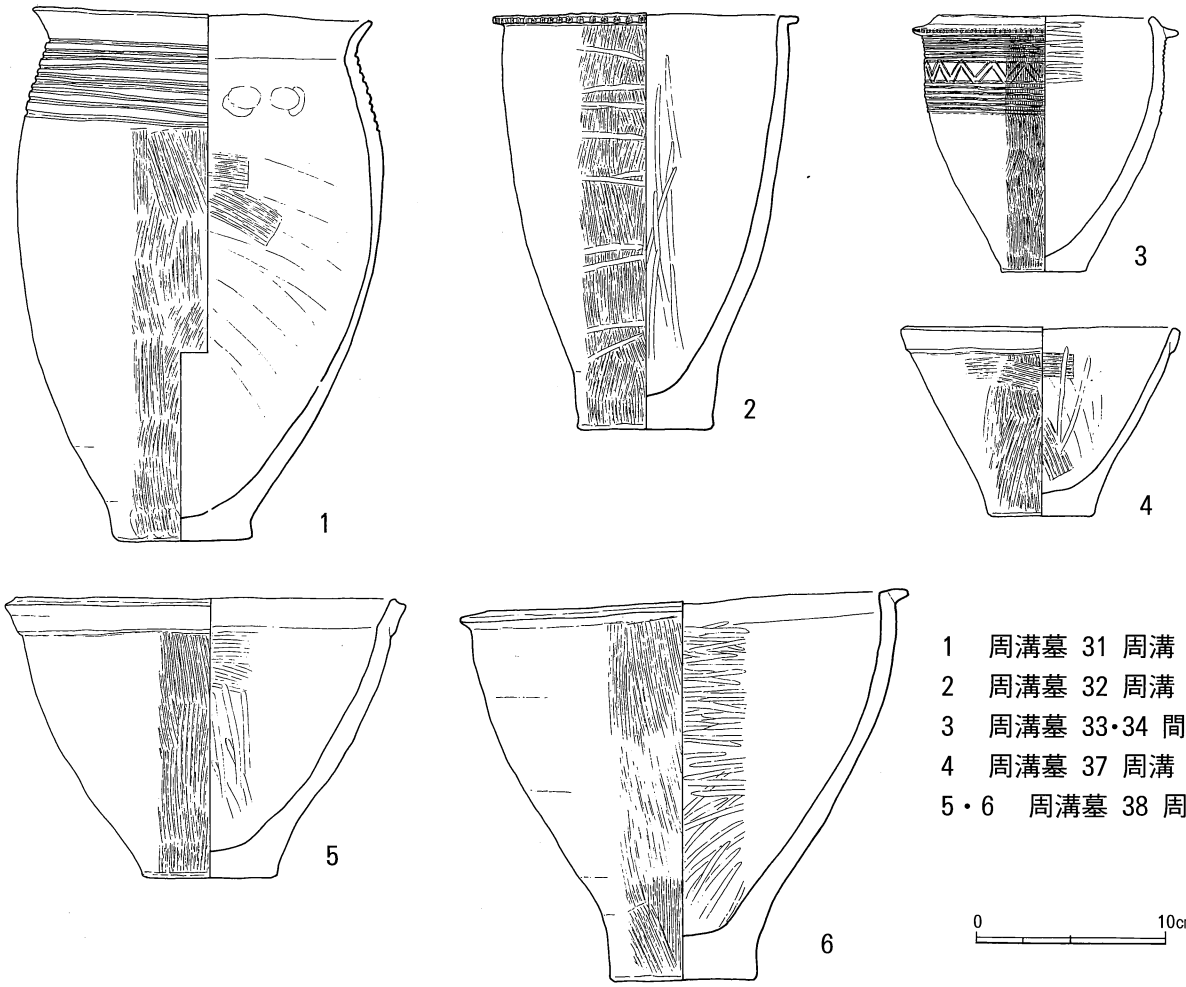


図7 佐古川・窪田遺跡 遺構配置図 (2)



- 1 周溝墓 31 周溝
- 2 周溝墓 32 周溝
- 3 周溝墓 33·34 間周溝
- 4 周溝墓 37 周溝
- 5·6 周溝墓 38 周溝

图8 周溝墓出土遺物

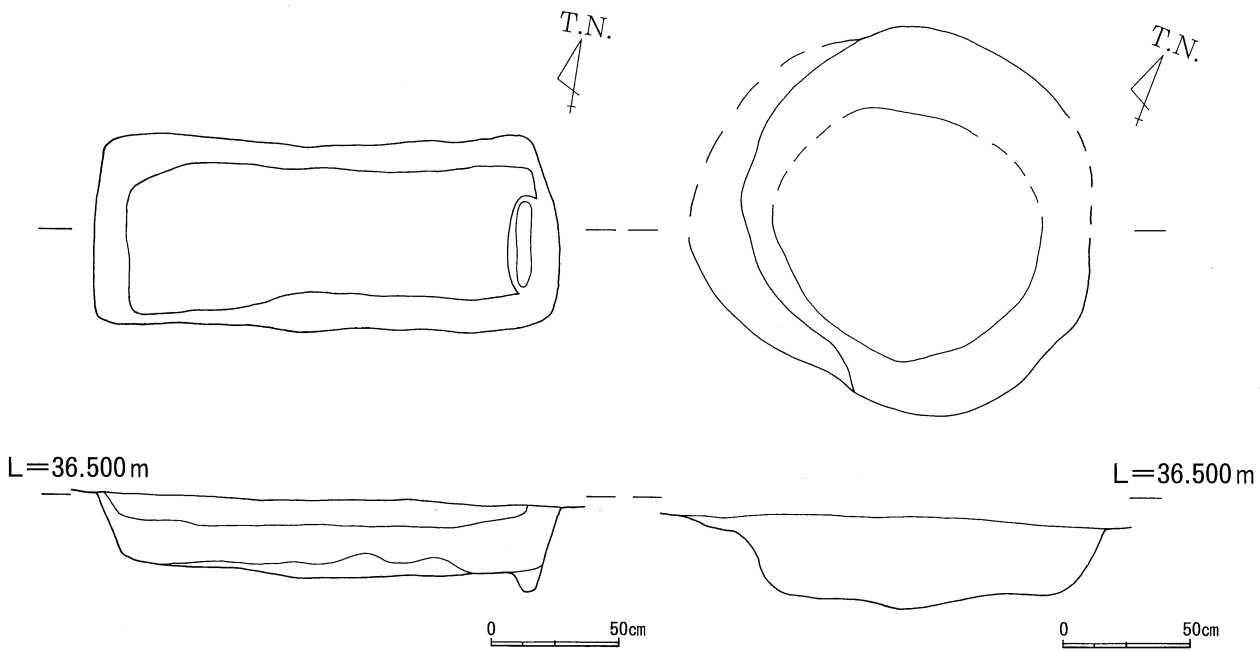


图9 周溝墓15主体部平·断面图

图10 周溝墓17主体部平·断面图

4. 北内遺跡

a. 立地

北内遺跡は南から伸びる尾根の先端部分の、東西を旧馬指川（現国道32号線部分）と東大東川に挟まれた微高地上に立地している。北内遺跡のすぐ南にある栗熊遺跡（北内遺跡と同一微高地上）では、古代末～中世初頭の遺構・遺物が確認されており、また、弥生土器と思われる遺物が多量に出土したと伝えられている。

b. 調査区割りと層序

調査はⅠ～Ⅳ区に分割して行った。Ⅲ・Ⅳ区間を微高地の頂部とし、そこから北・東・西に向かってそれぞれなだらかに下る地形となっている。

遺構面は3面あり、それぞれ古代末～中世初頭、弥生時代後期、弥生時代前期末～中期前半を中心とした遺構面である。弥生時代前期末～中期前半の遺構面以下は、佐古川・窪田遺跡、池下遺跡（栗熊地区）同様黄色系の粘土層が堆積しており、遺構・遺物は確認していない。

c. 弥生時代前期末～中期前半の遺構・遺物

概要：微高地の頂部付近は、確実な住居等は復原できないもののピットを多数、土坑、井戸等を検出しており、居住域であったと考えられる。ただ、大溝1以東には遺構は存在せず、また、調査対象地の北辺でも遺構は存在しない。このような状況から想定して集落の中心は調査対象地よりも南（微高地のより高い部分）に位置しているものと思われる。

大溝5：東西に長い調査対象地のほぼ中心部で検出した。微高地が北と東に下っていく途中にあり、流路方向は南南東から北西に向かっている。上述のとおり、これより東に遺構は無く、居住域を区画するという機能もあったと考えられる。ただ、この遺構が等高線にほぼ直行している（単なる水路の可能性）こと、居住域の西（次年度以降調査予定）で同様の溝を確認していないことから、現時点で「環濠」とするのは難しい。

木棺墓1：木棺墓1は長側板1辺と小口板1辺の痕跡を確認している。墳底を掘り込んで棺材を安定させる形式のものではない。棺内からは前期末に比定できる土器が出土しているが、



写真7 大溝5 南から



写真8 大溝5土層断面 南から



写真9 木棺墓1 棺痕跡検出状況 東から



写真10 木棺墓1 遺物出土状況 東から

完形のものや、完形に近い状態のものは全く無く、全て破片である。土器を意識的に破碎して供献した可能性も考えられる。

土坑：15基検出された土坑から一括廃棄された多量の土器群の資料（図11・12）を得ることができた。県下では少ない当該時期の良好な一括資料群であり、出土遺物（木棺墓・井戸出土資料を含む）を比較することにより木棺墓1→（土坑12・土坑3）→土坑36→井戸10→（土坑5・井戸11）の変遷を追うことができる。

土坑12の遺物は櫛描文を持つものがほとんどであるが、唯一点ヘラ描沈線文を施した逆L字状口縁の甕の破片（図11・9）を含んでいる。



写真11 井戸11遺物出土状況 北から

e. 古代末～中世初頭の遺構・遺物

概要：掘立柱建物1以東は耕作地であったと考えられ、南北方向の地割りに沿った非常に浅い小規模な溝を10数条検出しているのみである。IV区では地割りに沿った南北及び東西方向の溝を検出している。

掘立柱建物1：2間×5間の掘立柱建物で北側に庇が付く。面積は約50㎡である。建物内に約1.5×1.05mの貯蔵用であったと考えられる

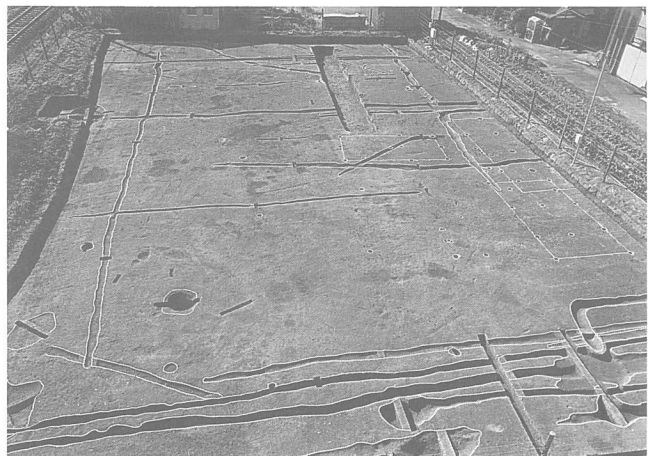


写真12 IV区全景 東から

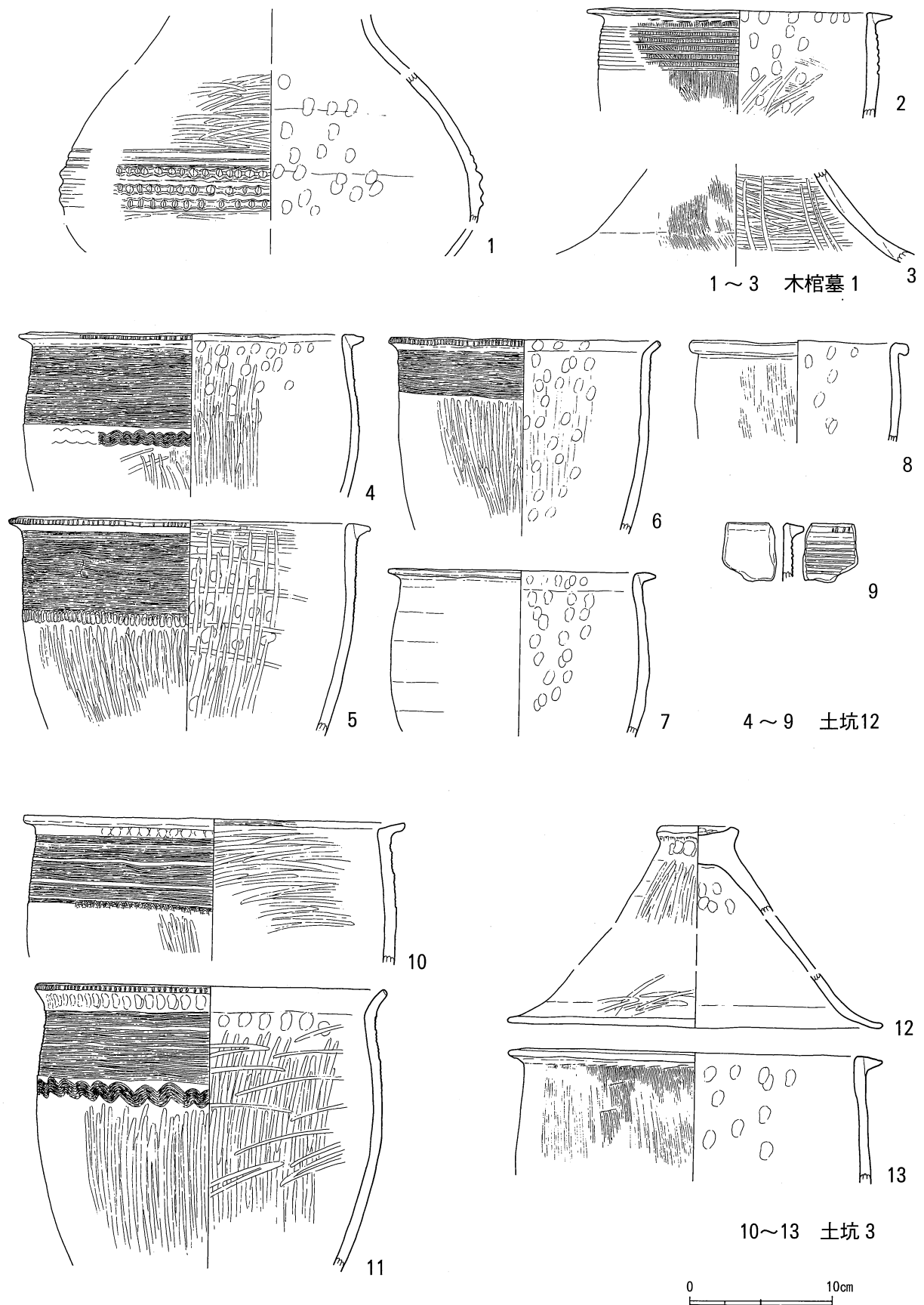
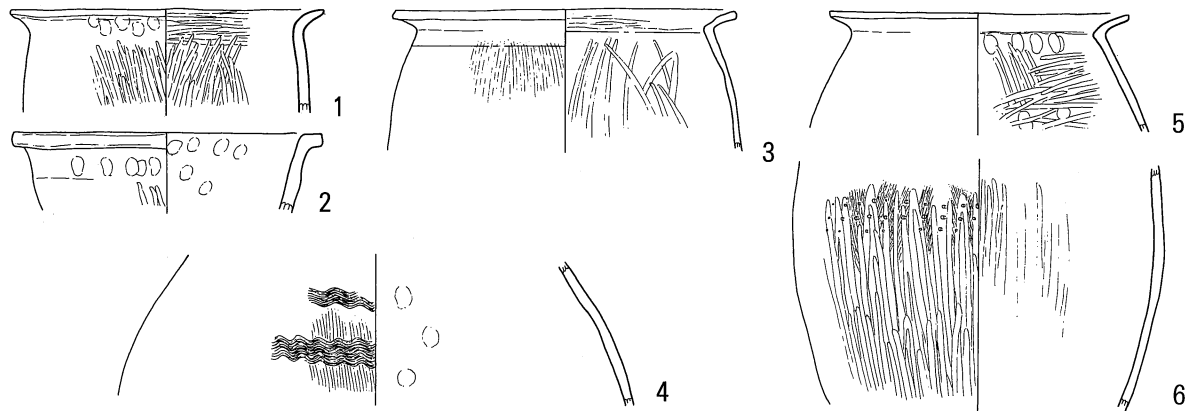
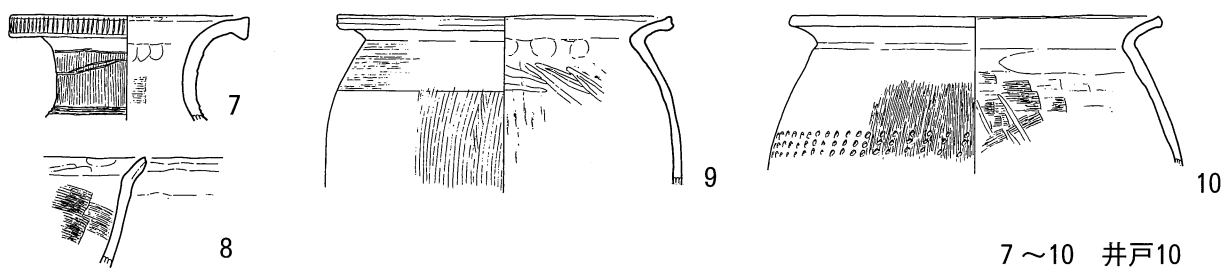


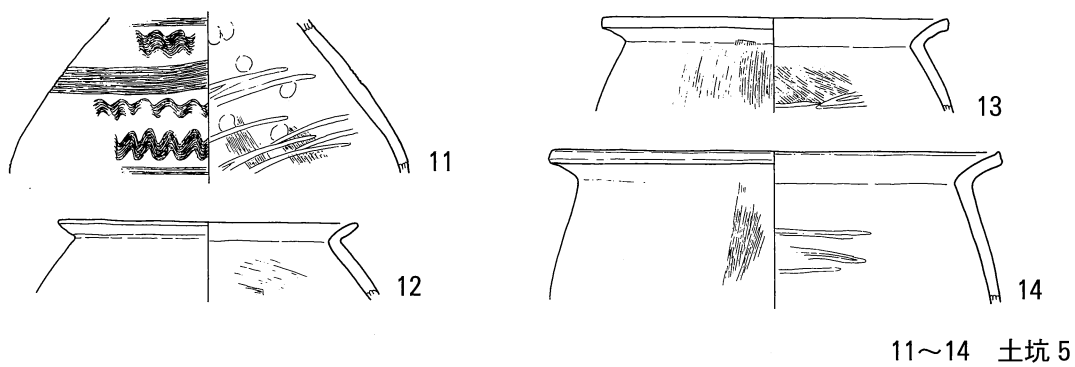
图11 木棺墓 1 · 土坑12 · 土坑 3 出土遺物



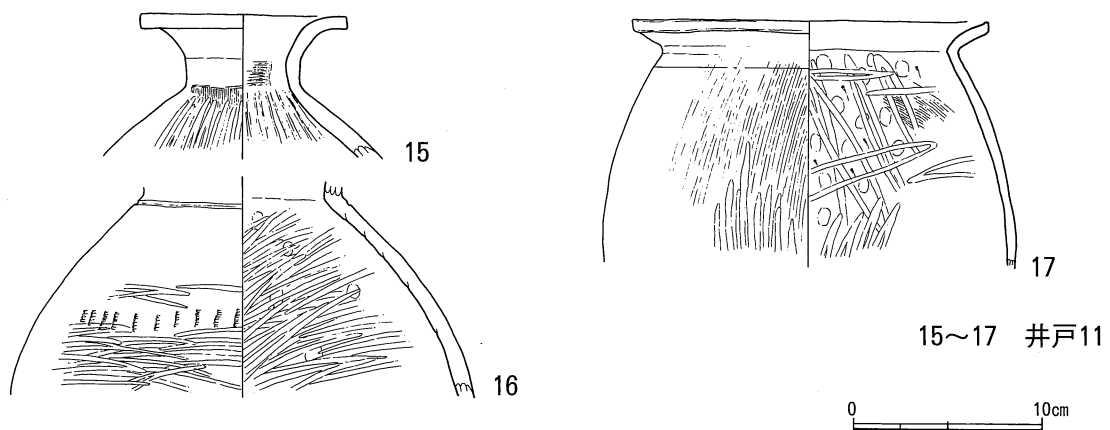
1~6 土坑36



7~10 井戸10



11~14 土坑5



15~17 井戸11



图12 土坑36·井戸10·土坑5·井戸11出土遺物

土坑がある。その埋土は基盤層等の土をブロック状に含んでおり、建物の廃絶に伴い意図的に埋め戻されたことが観察できる。また、建物の西には1.65m×0.6mの平面形が長方形の土壙墓と思われる遺構がある。

溝26：溝26は掘立柱建物1に付随すると考えられる溝であり、西溝を中心に土器が出土している（図13）。溝が小規模であること、遺物の出土状況、出土している土器の摩滅度にほとんど差が無いこと等からみて、これらは一括性の高い遺物である。1～4は土師器の杯である。5は土師器の椀であるが、高台が高いタイプである。体部は直線的に上方に伸びる。6・7は土師器の円盤状高台杯・椀である。8は土師器の椀である。9は内面に6分割のヘラミガキを施した土師器の椀である。外面のヘラミガキも密に行っている。10は土師器の椀の高台部分である。11は黒色土器B類の椀である。外面のヘラミガキは密である。12は黒色土器A類の椀である。底部にはヘラ切りの痕跡が確認できる。1～12はいずれも胎土が非常によく似ている。細かい砂粒や雲母を含み、北内遺跡から出土する弥生時代中期中葉の弥生土器の胎土に類似している。地元での土器制作が伺われ、西村遺跡における一元的な土器制作が行われる直前の様子を示しているといえよう。13・14は甕であるが、1～12と異なり、胎土は粗い粒子を含んでいる。

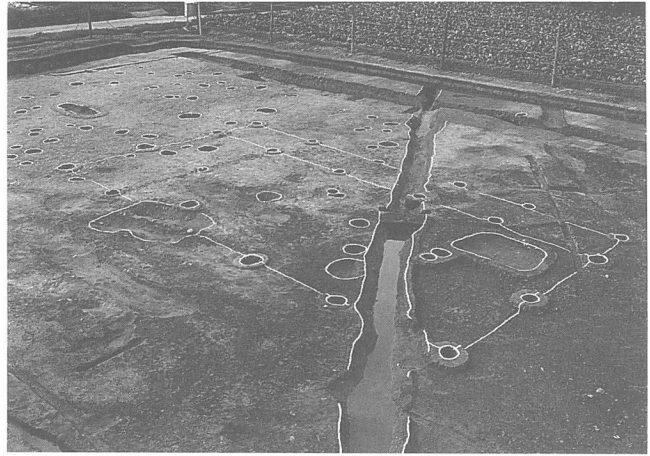


写真13 掘立柱建物1 南東から

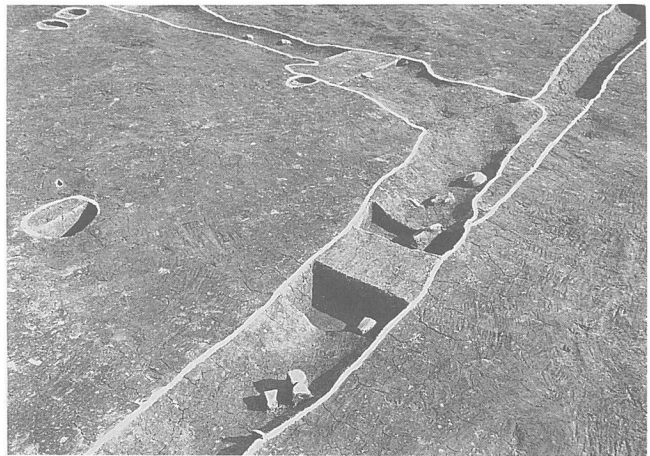


写真14 溝26遺物出土状況 北西から

（乗松）

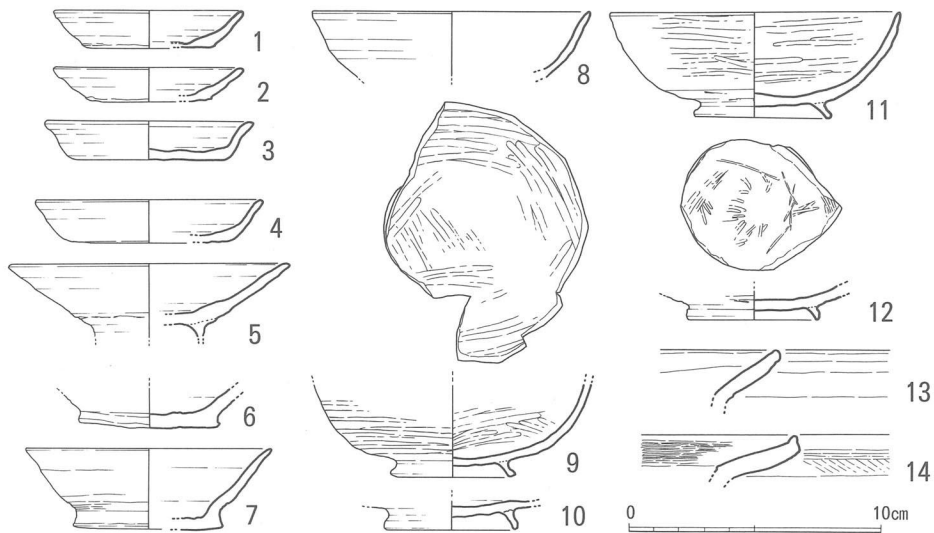
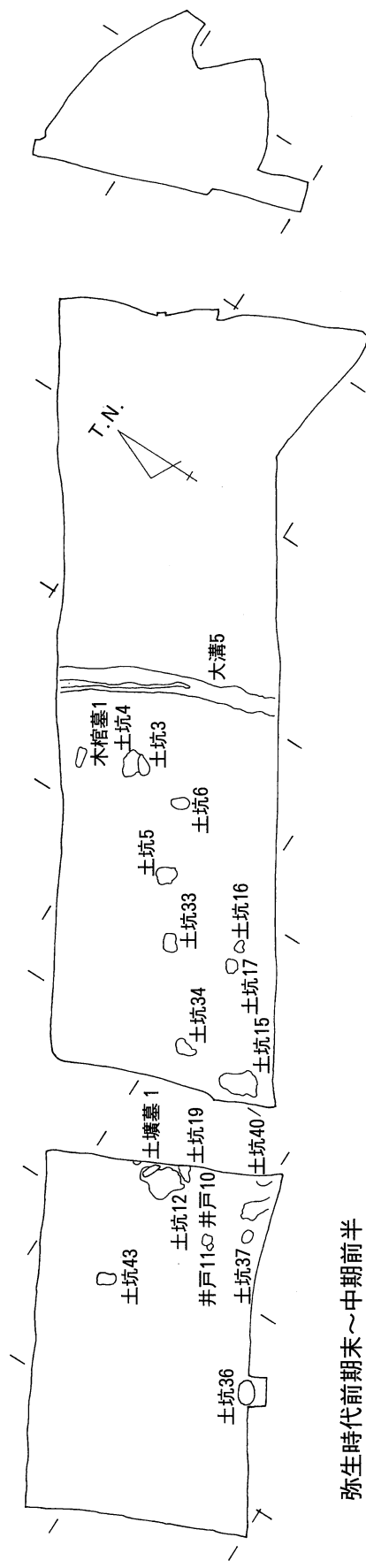
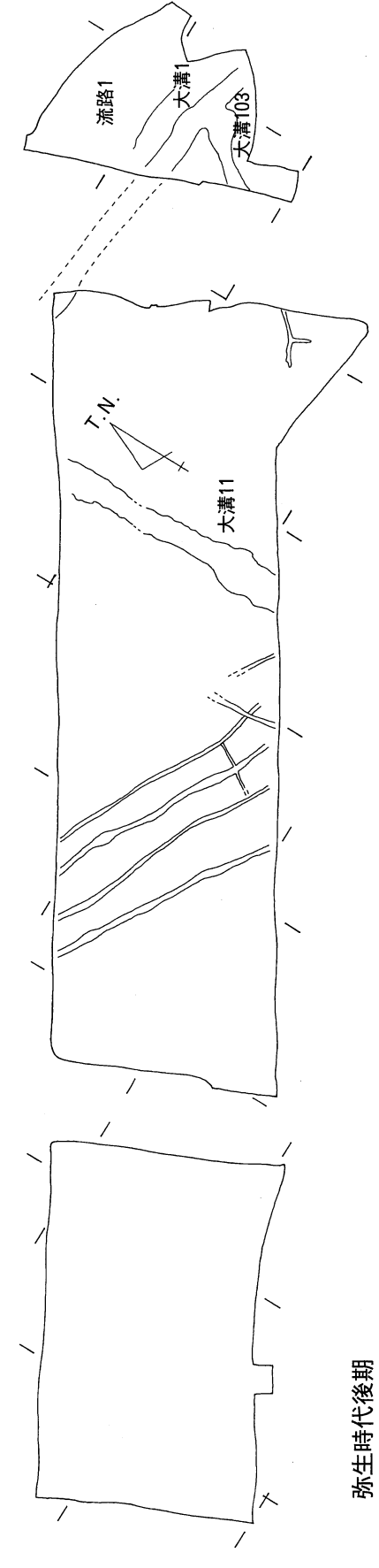


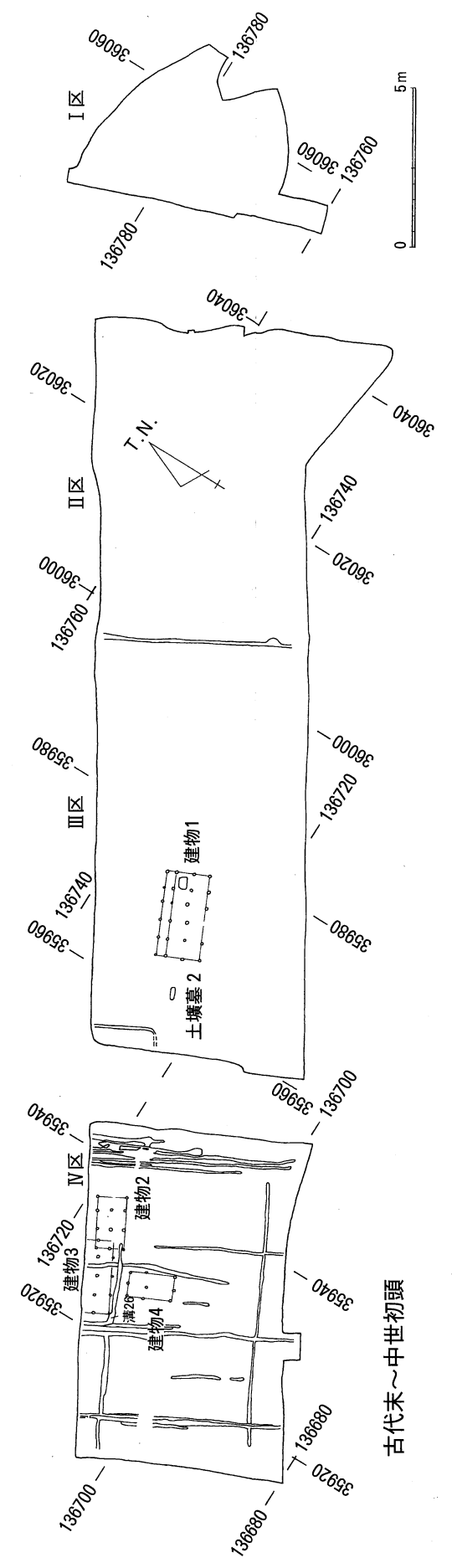
図13 溝26 出土遺物



弥生時代前期末～中期前半



弥生時代後期



古代末～中世初頭

图14 北内遺跡遺構配置图

5. まとめ

a. 佐古川・窪田遺跡の周溝墓群について

佐古川・窪田遺跡の墓域は弥生時代前期後葉～中期初頭までの周溝墓40基で構成される。近年、前期～中期初頭の周溝墓についてはその出現・成立（角南1999）過程を中心に詳細な研究が行われているが（本間1997・中村1998・角南1999等）、瀬戸内中部地域で当該期の群構成をなす周溝墓が調査された意義は非常に大きいと思われる。ただ、周溝墓の出現・成立過程に関して、現時点では明確な考えを持っていないため、本報告に譲ることとするが、その起源については寛倉里遺跡（李1997）を根拠に外来的なものであると考えている。

佐古川・窪田遺跡の周溝墓の平面形態は大きく円形、方形の2者に分けることが可能であり、更に細かくみていくと「コ」の字状を呈するもの（4辺のうち1辺がないもの）、周溝のコーナーの1部が途切れているもの等、様々である。初期周溝墓の平面形態には地域差のあることが知られている。平面形態が円形の周溝墓は佐古川・窪田遺跡の他、丸亀市龍川五条遺跡（宮崎1996）や岡山県百間川沢田遺跡（平井1993）で確認されており、瀬戸内中部地域の特徴としてあげることができる。また、他地域では円形周溝墓が中期以降にしか出現しないため、日本列島における円形周溝墓の出現地とされている（近澤1995・岸本1998）。また、香川県地域（更に限定すれば丸亀平野）に限れば、佐古川・窪田遺跡や龍川五条遺跡にみられるように、円形の周溝墓と共に方形の周溝墓が存在していることがその地域的特徴であるといえる。

また、先述のように、佐古川・窪田遺跡の墓域は、空闲地の存在を根拠として4つの群に分けることが可能であり、1つの周溝墓群は家族的な、もしくはそれに類似する1つの集団の「単位墓群」（岩松1992）であると想定している（佐藤1998）。ただ、2群と3群の周溝墓群を比較してみると、同様の在り方をしていないことに気付く。まず、その平面形態であるが、2群は円形・方形・「コ」の字状を呈するものと様々であるのに対して3群の周溝墓は平面形態が不明瞭なものもあるが、円形のものに比べて方形周溝墓が圧倒的に多い。また、周溝墓の配置原理であるが、2群では規模の大きな周溝墓7を構築した後、周溝を共有するようなかたちで隣接して規模の小さな周溝墓14・13・12・11を順に築いている。また、そのすぐ東においても、小規模な周溝墓9は規模の大きな周溝墓8の存在を前提として構築されているようである。このように、2群では規模の大きな周溝墓を構築した後、それに隣接するように規模の小さな周溝墓を構築している。一方、3群では、比較的同規模の周溝墓を微高地の高い部分（南）から低い部分（北）へと周溝を共有しながら順に構築している状況が窺え、規模の大きな周溝墓34が隣接している周溝墓に先行して構築されているということは必ずしも無いようである。以上、2点からのみ2群と3群の比較を行ったが、それぞれが全く同質であるとはいえず、これは、各周溝墓群を築く各集団の差であると考えられる。つまり、佐古川・窪田遺跡では全く同質でない集団が周溝墓という共通した墓制によって、同じ墓域を形成しているということを読み取ることができ、そこには当時の人々の意識や、地域社会の状況が反映されていると考えられる。弥生時代前期の灌漑施設であると考えられる大溝1の存在は、ある程度のまとまった労働力の結集があったことを想定させ（大久保1995・佐藤1998）、その灌漑水路の維持・管理に異なる集団が協業していたとも考えられ、それが佐古川・窪田遺跡の墓域としてあらわれていると推測することができる。ただ、現時点では、佐古川・窪田遺跡の墓域に対応する集落は確認されていないため、推測の域を出ない。

b. 佐古川・窪田遺跡と北内遺跡の墓制について

県下では弥生時代前期の墓制を示す遺跡として佐古川・窪田遺跡、周溝墓・木棺墓・土壙墓で墓域を構成する龍川五条遺跡、木棺墓・土壙墓を長軸方向、短軸方向に主軸を揃えて列状に配置する観音寺樋ノ口遺跡（片桐・信里1998）があるが、それに続く中期前半の墓制については不明瞭であった。今回の調査で北内遺跡において前期末の木棺墓と中期中葉の土壙墓を検出し、多少ではあるが、中期前半段階の墓制が明らかになった。

北内遺跡の木棺墓・土壙墓は集落の縁辺と思われる場所に、密集することなく存在している。また、先述のように棺内（壙内）からは底部から若干レベルの高い位置で土器片が比較的多く出土しており、土器を意図的に破碎したもの、もしくは元来破碎されていたものを供献していたと考えられる。今回検出した墓は2基だけであるが、集落が前期末～中期中葉まで営まれていたことを考えると、中期前半を通してこのような墓制がとられていたと思われる。

北内遺跡のような事例が中期前半における県下での普遍的な状況であるかどうかは分からないが、少なくとも、西隣の微高地上に築かれた前期後葉を中心とする佐古川・窪田遺跡と比較することは可能であろう。そしてその墓制の変化は著しく、中期初頭の段階で人々の意識や社会状況が大きく変化したことを示しているものと考えられる。

c. 先端部を欠損している石鏃の副葬について

佐古川・窪田遺跡では周溝墓34の主体部から石鏃が2点出土しており、そのうち1点は先端部と基部を欠損している。瀬戸内中部地域を中心に弥生時代前期の墓を概観すると、佐古川・窪田遺跡も含めて、愛媛県西野Ⅲ遺跡（長井・土居1974）、同持田町3丁目遺跡（真鍋1996）、百間川沢田遺跡（神谷・草原1992）、徳島県庄・蔵本遺跡（北条1998）と先端部を欠損している石鏃が出土している。先端部欠損石鏃が墓から出土することには「死者への鎮魂」（長井・土居1978）、「折損石鏃供献」（行田1985）といった考え方があがるが、一体、どのような目的があったのか、現時点では断言できない。ただ、佐古川・窪田遺跡では周溝墓の周溝ではなく主体部から出土しているため、ここではとりあえず副葬されていたものと考えておく。

中・四国地域における弥生時代前期の墓域は縄文時代の系譜を引く環状配置、九州北部地域の影響を受けた列状配置、墳丘墓状の配置で構成されているとされる（草原1992）。上述の西野Ⅲ遺跡、持田町3丁目遺跡、百間川沢田遺跡、庄・蔵本遺跡ではそれぞれの墓が列状、もしくは主軸方向を揃えることを意識して配置され、それらが墓域を形成している。墓が主軸方向を揃えて列状をなすのは九州北部地域では弥生時代になってからであり（溝口1998）、瀬戸内中部地域においても主軸方向を揃える配置の墓域構成は弥生時代の新たな墓制であるといえる。佐古川・窪田遺跡を含めて、先端部欠損石鏃の副葬は弥生的な墓制を示す遺跡でみられる。

（乗松）

引用・参考文献

- 李 弘鐘 1997 『寛倉里周溝墓』高麗大学埋蔵文化財研究所 〈未見〉
- 岩松 保 1992 「墓域の中の集団構成（前編）－近畿地方の周溝墓群の分析を通じて－」『京都府埋蔵文化財情報 第44号』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 大久保徹也 1995 「基幹的灌漑水路と灌漑単位」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第6冊 上天神遺跡』香川県教育委員会ほか
- 片桐孝浩・信里芳紀 1998 「弥生時代の墓制について－樋ノ口遺跡の事例を中心に－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 神谷正義・草原孝典編 1992 『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 岸本道昭 1998 「播磨の周溝墓－円形優位の地域色－」『龍野市文化財調査報告20 小神辻の堂遺跡－仮称揖龍農業共同組合営農センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』龍野市教育委員会
- 草原孝典 1992 「中・四国の墓」 神谷正義・草原孝典編『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 佐藤竜馬 1998 「まとめ」 大久保徹也・佐藤竜馬編『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』香川県教育委員会ほか
- 角南聡一郎 1999 「初期区画墓と土器棺墓」 宇治原靖泰・角南聡一郎『古川遺跡－（仮称）門真市保険福祉センター建設に伴う発掘調査報告書－』門真市教育委員会
- 近澤豊明 1995 「円形周溝墓について」 三好博喜編『綾部市文化財調査報告 第22集 新庄遺跡』綾部市教育委員会
- 長井数秋・土居睦子 1978 「西野Ⅲ遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財報告書』愛媛県教育委員会
- 中村 弘 1998 「近畿地方における方形周溝墓の出現」『網干義教先生古希記念考古学論集』網干義教先生古希記念会
- 平井 勝編 1993 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84 百間川沢田遺跡3 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』岡山県教育委員会ほか
- 北條芳隆編 1998 『徳島大学埋蔵文化財調査報告書 第1集 庄・蔵本遺跡－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』徳島大学
- 本間元樹 1997 「弥生時代前期の区画墓」 本間元樹・駒井正明ほか『田井中遺跡（1～3次）・志紀遺跡（防1次） 陸上自衛隊八尾駐屯地内施設建設事業に伴う発掘調査報告書（財）大阪府文化財調査研究センター
- 真鍋昭文編 1995 『埋蔵文化財発掘調査報告書 第58集 持田町3丁目遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 溝口孝司 1998 「カメ棺墓地の移り変わり」『弥生人のタイムカプセル』福岡市博物館
- 宮崎崎哲治編 1996 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第23冊 龍川五条遺跡 I』香川県教育委員会ほか
- 行田裕美 1985 「まとめ」『西吉田遺跡 津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会

Ⅲ. 資料整理の概要報告

1. 鴨部・川田遺跡

a. 本年度整理事業の概要

本年度は平成3年度調査を実施した鴨部・川田遺跡の整理事業の2年目に当たる。本年度は昨年度に引き続き木製品実測、遺構図面の実測、石器・環濠以外の土器の実測を実施し、『鴨部・川田遺跡Ⅱ』第1・2分冊の編集を行った。

b. 弥生時代集落について

本遺跡からは環濠に囲まれた弥生時代の集落が検出されているが、本年度は環濠出土土器以外の土器の実測作業を行った。この結果、集落内外の出土土器は多条のヘラ描沈線文や貼付突帯を施す壺、逆し字口縁の甕を中心とする弥生時代前期後半の土器が大半を占めるが、削出突帯や段をもつ壺、段やヘラ描沈線文2条を施す甕等の弥生時代前期中葉や、櫛描直線文や波状文をもつ壺・甕等の弥生時代中期初頭の土器も確認された。したがって、集落は弥生時代前期中葉から中期初頭まで営まれたことが推定される。また、環濠の西部においては、環濠の下層から環濠掘削以前の溝（SD1067）が検出された。出土土器から、SD1067は弥生時代前期中葉に掘削されたことがうかがわれる。なお、来年度以降に環濠出土土器の整理を行うが、環濠の存続時期については再検討する必要がある。（森下）

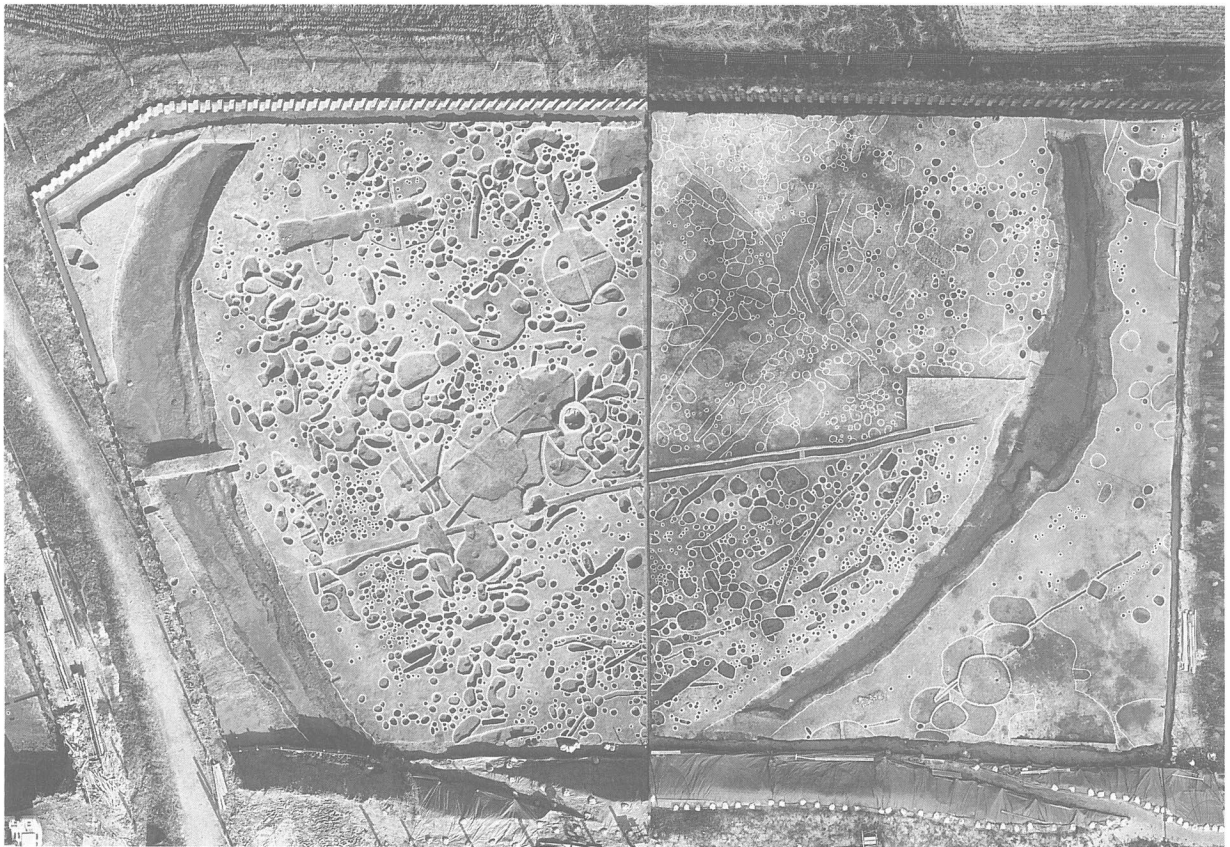
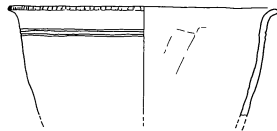
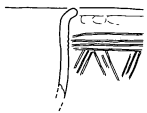
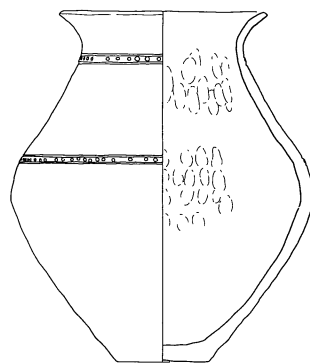
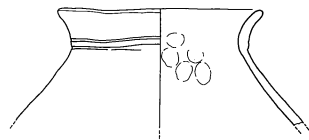


写真15 鴨部・川田遺跡 弥生時代環濠集落



0 10cm

S D 1067出土土器

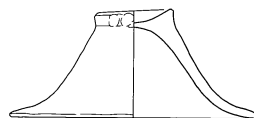
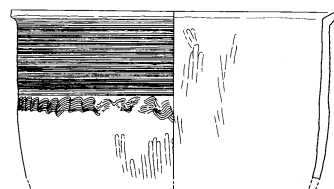
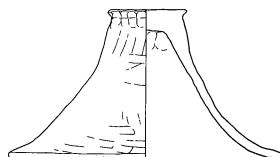
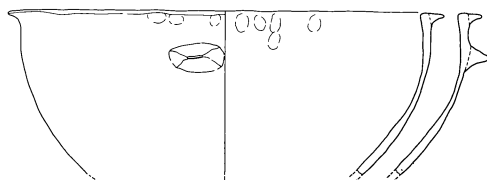
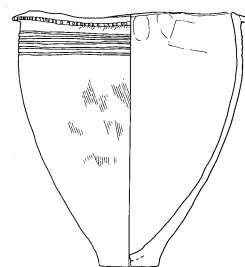
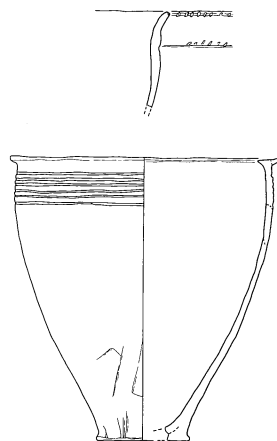
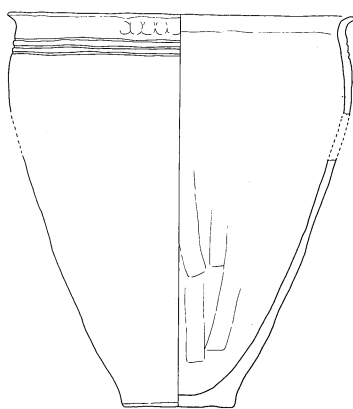
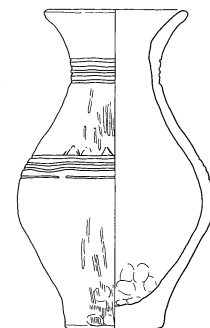
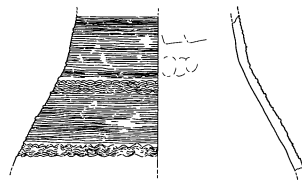
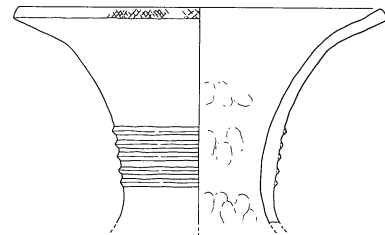
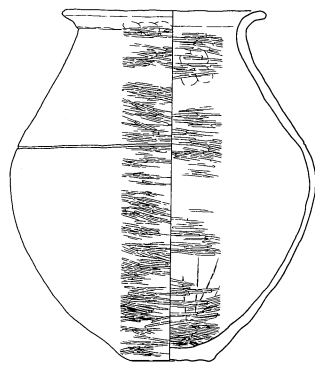
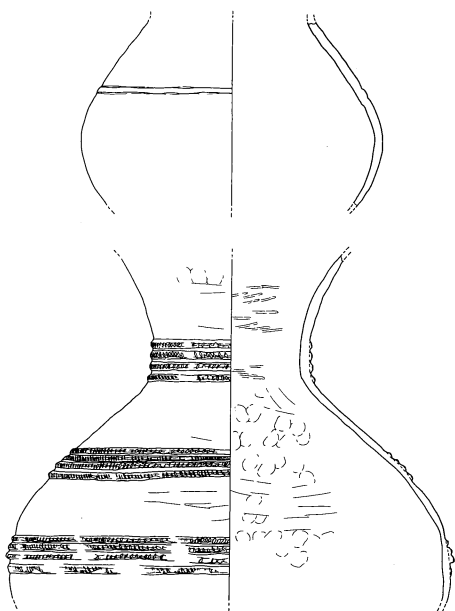


図15 鴨部・川田遺跡 出土土器 S=1/6

2. 野牛古墳

野牛古墳は大川郡津田町津田字神野に位置する。高松東道路建設に伴い、平成7年度に500m²の発掘調査を実施した。調査内容については当該年度の概報を参照されたい。

整理作業は今年度の10～12月の3ヶ月間をかけて行った。遺物の実測図面の作成を行う傍ら遺構図面に関しては調査時の図面を編集し掲載図面の原図を作成した。その後レイアウトを行い、トレースへと作業を進めた。遺物では、以前野牛古墳の石棺が開口された際発見された玉類が津田町郷土館に収蔵されていたことから、この図面・写真も許可を得て掲載できた。この他にも同館の収蔵品を実測・掲載できるなど、津田町教育委員会には多大な御協力を得た。

考古学的な調査以外に自然科学的分析も行った。赤色顔料の分析では使用された赤色顔料はすべてベンガラであることが判明した。玉類の材質と産地分析では、管玉のうち2点が碧玉で、1点は佐渡産であることが明らかになった。古墳時代の碧玉の分析で佐渡産の碧玉が関東北陸以西に分布することが明らかになったのは初めてである。出土した青銅鏡の保存処理を調査終了時点で行った。鏡面に付着した麻布は良好な遺存状態を示していた。この状況・文様面への玉の付着などから、鏡は布に包まれ鏡面を外に向けて首付近に置かれていたと推測している。

時期を直接示す土器等は出土していないが、遺物の観察から野牛古墳は古墳時代前期末の4世紀後葉頃の築造と判断した。白玉はその形態・研磨痕が古い様相を残している。古墳の位置する津田町には古墳時代前期から中期前半の古墳が密集しており、野牛古墳もその中の1基である。この古墳群は地形により南北2つの小群に分かれる。両者はともに、前方後円墳に竪穴式石室を安置し船載鏡を副葬する階層を頂点とし、その下に円墳に箱式石棺を安置し小型仿製鏡を副葬する階層を形成する。後者の典型例である野牛古墳を通して、このような古墳群の構成を把握できた。

津田町でも弥生時代終末の遺構が見つかっており、これら在地の人々が古墳群も築造したと考えた。しかし、これまで明らかにされてきたように地形的に海に頼らざるを得ない状況にあり、前方後円墳を含む古墳群を形成するような勢力にはなりにくい。やはり畿内政権と関係を持つことにより大きな力を得たとの考えは妥当である。今回の野牛古墳あるいは岩崎山1・4・5号墳でも漁具や海に関連する遺物が出土しているのも、元々の出自を反映しているのであろう。5世紀に入り、内陸部に四国最大の前方後円墳である大川茶臼山古墳が築造されるにいたり、畿内政権による当初の目的を失い、津田町では古墳群の形成が途絶えてしまう。

(古野)

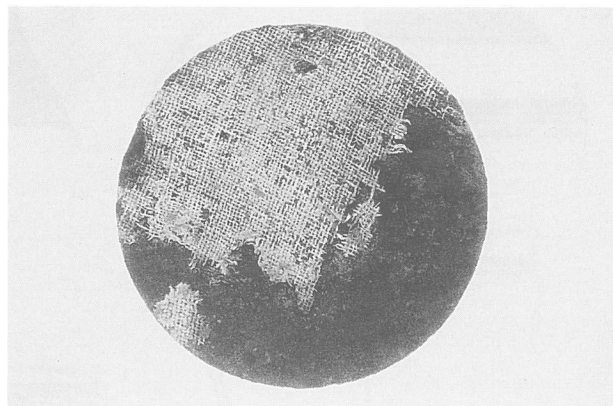


写真16 鏡面麻布付着状況



写真17 石棺全景（蓋石除去後）

3. 末3号窯跡

末3号窯跡は大川郡志度町末に位置する須恵器焼成窯遺跡である。高松東道路建設に伴い、平成3・7年度に合計3,939㎡の発掘調査を実施した。調査内容については当該年度の概報を参照されたい。

整理作業は今年度の1～3月の3ヶ月間をかけて行った。遺物数量はコンテナ換算で28箱になる。

遺物に関しては、注記・接合の後、実測図面の作成を行い、一方遺構図面に関しては調査時の図面を編集し掲載図面の原図を作成した。両者を並行して行い、遺構・遺物図面を遺構単位でレイアウトし、トレースへと作業を進めた。東讃地方では数少ない窯跡の正報告ということもあり遺物図面を多数掲載したかったが、やはり全体量が少ないことから300点足らずの図面掲載となった。遺構図面は調査範囲全体の遺構配置図を調査時に作成していなかったことから、今整理で初めて全体の遺構の関係が判明した。この他、遺物の復元はできる限り行うように努め、それらを写真撮影し図版に掲載した。

以上整理作業の結果、末3号窯跡は出土須恵器から見て、7世紀中頃の窯跡であることが判明した。操業期間は短い。これは遺物の形態差・出土量および遺構の状況いずれもが示している。出土した須恵器杯には、古墳時代に主流であった形態の蓋杯はすでに無く、また後代の高台付蓋杯は未だ製作されていない。このような状況は他の窯跡を見ても類例に乏しいことから、丹念に遺物の観察を行い念を押ししている。出土量に関しては窯跡を破壊した農道開削時に多くの遺物が出土したと聞いたが、2年度目に行った灰原の予想された溜め池の調査でも最深部まで調査しなかったからか出土量が少なかった。また末1号窯跡に見られた焼成部の舟底状土坑等も存在せず、大きな補修痕もなかった。

窯跡周辺では他の遺構も見つかっている。ピットも検出したが、掘立柱建物跡を構成できなかった。窯跡の上には排水溝が逆U字形にめぐり、焚き口の15m下方には運搬用の通路と思われる溝や平坦面がほぼ水平に作られている。これらの埋土も、長期間の使用を窺わせる状況にはない。この他性格不明の土坑が存在し粘土採取坑かとも考えたが、明らかにできなかった。

末窯跡群の工人を掌握した豪族は遺跡の分布状況から志度町の南の内陸側の長尾町方面に存在した可能性が高く、また形態の類似する杯が高松市や坂出市の遺跡から出土していることから、生産した須恵器はその豪族の下で流通した可能性がある。(古野)



写真18 末3号窯跡



写真19 窯跡下方の通路状遺構

ふりがな	こくどうばいばすけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	佐古川・窪田遺跡 北内遺跡 鴨部・川田遺跡 野牛古墳 末3号窯跡							
巻次	平成10年度							
編著者名	藤好史郎・森下友子・古野徳久・乗松真也							
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL 0877-48-2191							
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局							
発行年月日	1999年3月31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数		
32P	3P	29P	0P	0P	15枚	19枚		
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° , ' , ''	東経 ° , ' , ''	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町	遺跡番号					
さこがわくほたいせき 佐古川・窪田遺跡	香川県綾歌郡 綾歌町栗熊東 佐古川・窪田	37384		34° 13' 45''	133° 53' 0''	19980413 ～ 19980630	1164	国道32号 バイパス
きたうちいせき 北内遺跡	香川県綾歌郡 綾歌町栗熊西 北内	37384		34° 14' 02''	133° 16' 15''	19980727 ～ 19990125	5608	国道32号 バイパス
かべ・かわたいせき 鴨部・川田遺跡	香川県大川郡 志度町鴨部 川田・秋友	37306		34° 17' 45''	134° 13' 15''			高松東道路
のごふん 野牛古墳	香川県大川郡 津田町津田 神野	37304		34° 16' 50''	134° 14' 46''			高松東道路
すえさんごうかまあと 末3号窯跡	香川県大川郡 志度町末 末西	37306		34° 18' 19''	134° 11' 56''			高松東道路
所収遺跡名	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
佐古川・窪田遺跡	墓・集落	弥生時代前期	周溝墓40		弥生土器・管玉・石鏃		周溝墓群	
北内遺跡	集落・墓	弥生時代中期	木棺墓・土壙墓・大溝		弥生土器			
鴨部・川田遺跡	集落	弥生時代前期	環濠・平地式住居・土坑		弥生土器・加工斧・弥生土偶・磨製石剣・石槍・木製農具		環濠集落	
野牛古墳	古墳	古墳時代	古墳(箱式石棺)		仿製鏡(珠文鏡)・玉類・鉄器			
末3号窯跡	窯跡	古墳時代	須恵器焼成窯		須恵器・土師器			

国道バイパス建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報

平成10年度

佐古川・窪田遺跡 北内遺跡

鴨部・川田遺跡 野牛古墳 末3号窯跡

平成11年3月31日

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県教育委員会
(財)香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷 株式会社中央印刷所